

横湯久美

Kumi Yokoyu

<http://www.kumiyokoyu.com>



# 花どろぼうの覚書

Kumi Yokoyu exhibition

A Grave Robber And Flowers

2024 March 18 (Mon.) – 31 (Mon.)  
close (Tue.) 12:00 - 19:00 (last day - 17:00)

gallery Nayuta

Okuno bldg. #511, 1 - 9 - 8 Ginza, Chuo-ku, Tokyo, 1040061 Japan

東京都中央区銀座 1-9-8 奥野ビル 511

<https://gallernayuta.com>





## 花どろぼうの覚書 A Grave Robber And Flowers

2024

ピグメントプリント, ミラー

537 x 356 mm, 363 x 240 mm, 246 x 164 mm, 69.4 cm each

誰も見ぬ花、ひょっとしたら死者の見る花。墓で死者に花を捧げた人々は、あの世を信じているのだろうか。信じていないで、人は花をたむけられるものだろうか。あの世がないのであれば、この花を見るのは誰だ。誰も見ぬ花であれば、私はこの美しい花々を覚書しよう。死者が見ているのならば、私は花どろぼうであろう。

私はいつか墓じまいすることとなる。祖母や先祖、亡き人たちに、時代の事情と、子もない私の不出来を、今のうちに許してもらいたいと墓参りを重ねる。そうしていると、自分は墓にも入らず花ももらえず、死ぬのだと想い知ることとなる。

供えられた花々は、死者の豊かで充実した人生、家や人があったことを示している。花をもらうことはたやすいことではないのだ。名誉の花。

あの世はあるのか。その花は果たして死者に届いたのか。墓石にしみ込むように映る花々を眺めていると、あの世は確かにあり、この世の祈りは彼方へ届くのだと思われてきてならない。

撮影地である世田谷区の烏山寺町常栄寺は、1923年の関東大震災後に東京東部から26の寺とともに現在の場所へ移転してきた。

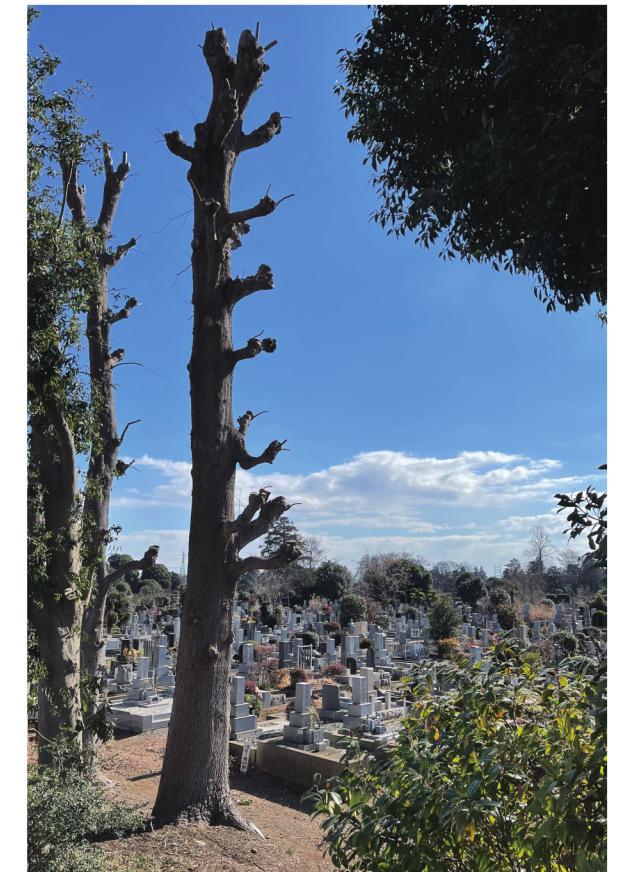
東京の東から西に来ると富士山が急に大きくなり、富士からの風か空気が透き通るようで冷たい。供養を怠らず整える寺のせいなのか、風のせいか、ここの花々はいつも鮮やかだ。ここには枯れた花がない。寺の移転により移り住んできた死者たちも、私が感じるこの空気や光の違いを感じるのだろうか。

もう一つの撮影地、多磨霊園は、都営の公園霊園である。東京の市街地化による墓地の不足により、関東大震災の年に開園した。この100年の西東京の死者たちをまとめる。

ヨーロッパの大都市の郊外墓地を真似て造られた巨大な公園墓地には、「名譽靈域通り」と名付けられた当時の富裕層の墓が並ぶエリアがある。通りの名前に違和感を持ちながら、普通選挙権のなかった時代の困難を、選挙のたびに話していた祖母を思い出す。私の祖母は、1914年第一次世界大戦開戦の年に生まれ、第二世界大戦が開戦した1939年に私の母を産み、治安維持法に反し死んだ夫の未亡人、非国民として生き抜き苦労をした人だった。私は、大正デモクラシーの雰囲気や平等のない社会の悔しさを聞いて育ったが、それらの時代の価値観がこのように残る風景は、祖母の声のように生々しい。

木々が死者の形を真似ているのか、木に死者が憑いているのか、時に人のような形となる。名譽靈域通りの道は、木々を使い100年をかけて伸び天へと繋がる。

撮影地／ 東京都世田谷区北烏山五丁目烏山寺町常栄寺、 東京都府中市多磨町都立多磨霊園





## ある誕生日の碑 There Once Was A Birthday

2024

ピグメントプリント、ラムダプリント、ミラー

363 x 240 mm, 246 x 164 mm, 69.4 cm, 89 x 127 mm each

高校で二人の親友ができた。3年間はいつも三人で過ごした。いつしか、彼女たちと誕生日に花束を毎年贈りあうようになった。誕生日に大きな花束をもらい、彼女たちの雰囲気に合う花束を選び贈るようになると、いよいよ自分の人生が始まったような、大人になったような気分になった。

私の誕生日は、戦後21年の8月9日長崎原爆記念日。テレビは戦争や原爆の話ばかり。戦争で人並み以上に苦労した祖母の思い出話も加速した。おまけにお盆の頃だ。昭和の花屋には仏花ばかりで、この時期の花選びには難しいと二人はぼやいた。

仏花の感じが微妙にする真夏らしい花束。これが私らしい花束なのだろうと眺めていた。そう言えば、花の写真を初めて撮ったのは、この花束が暑さで枯れる前に残そうとした時だった。

花束をくれる特別な友がいたのだ。思春期の私を支えた大好きな二人。これは、私の青春の始まりの記憶。

現在、私には素敵な街で美味しいものを食べ、花束をもらったり贈ったりする誕生日がたまにはある。私は大切な人から花束をもらえるような人生を持っている。しかし、当たり前は永遠でないことを知る歳になった私は、この幸せがいつまであるのだろうか、不安も消えない。真夏のこの幸せを、石碑に埋め込むように、街の石に映る幸せの像を念写する。

石に映る像を見つめ、シャッターを押していると、もしかしたら、大切な家族と共に墓に入ろうとする者たち思いとは、このような感じなのだろうかとも考えてしまう。墓に入るかのように、自分の墓に花を供えてもらったかのように、妄想ししまうのだ。これらのピースは、私のお墓のようなもの、綺麗な花と街と大好きな人と過ごす私の幸せの記録なのである。私の誕生日の碑だと言ってみよう。

撮影地／ 東京都中央区銀座、東京都千代田区丸の内